

滝波章弘著

『領域化』する空間

——多文化フランスを記述する——

荒 又 美 陽

近年のフランスに関する議論において、「多文化」というキーワードから想起されるのは移民とその子孫による生活習慣とそれをめぐるコンフリクトであろう。ムスリム女性が身に着けるスカーフをめぐる論争や、移民の多い大都市郊外における貧困や非行の問題はよく知られており、またその「孤立」などもしばしば語られる。本書タイトルの「領域化」という表現は、またこの見方を支持するもののように見える。

しかし本書をいったん開けば、それが予断に過ぎなかったことに気づく。移民がもたらす多文化性にももちろん触れられているが、本書が扱う範囲はより広い。一つのイシューではなく、現代社会をミクロに観察した時に見えてくる多文化性こそが本書のテーマである。それらに領域があることは、いくつかの空間に実際に身を置いてじっくり観察して初めて得られる知見であり、一人のフィールドワーカーの長期にわたる研究（地元の人々とサッカーをするなど、そこには多くの「実践」も含まれている）によらなければ得難い情報が多数含まれている。

これまでもフランスの多様性を論じた本や論文は書かれてきた。まずは各地の気候や食習慣などに始まり、産業構造の違いや経済格差を説明するものがある。あるいは歴史的に、現在とは異なる領域を支配した領主の存在などを示し、政治的な区分の変化を述べるものもある。近代国民国家形成期とのかかわりでは、フランス語への統一のために地域語を抑圧してきた歴史が、とくにEU統合に向けた言語政策とのかかわりでフォークスされた時期もある。あるいは、フランスの同義語としてしばしば用いられる「六角形 (Hexagone)」の外にあるフランス領、つまり帝国主義の遺産としての海外フランス (France d'outre-mer) が議論の対象となることもある。

それに対して、本書が問題とするのは多文化性が特定の状況下で作りに出す領域である。しかも、それは国境線のような目に見えない形のものだけでなく、「イメージ」、「ふるまい」、「雰囲気」といった、目に見えない形で、しかし確実に存在している境界の問題である。そこには、政策やメディア言説のような強力な力だけではなく、日常のミクロな行為の積み重ねが関与している。ときにはそれが差異を強調し、排除を生み出すようなミクロな権力の発現となることもある。そのような領域をインタビュールなどを通じて引き出していくのが著者の基本的な姿勢であり、本書を他の研究から際立たせている特徴といえる。

著者の滝波章弘氏は、フランスを主なフィールドとして、観光を軸に研究活動を続けてきた地理学者である。二〇〇五年にも単著『遠い風景——ツーリズムの視線——』（京都大学学術出版会、三二一頁）を公刊している。九〇年代から発表されてきた彼の論

考で一貫して重視されてきたのは、観光の場をつくり出す要素とそれにまつわる人々の経験であると評者は考える。とりわけ、「雰囲気」というキーワードとそこに迫る方法については長い研究実績があり、本書はその集大成ともいえる作品である。

二

まずは表紙を見てみたい。そこには現代フランスの三枚の写真と、日本語、フランス語のタイトルが出ている。「あとがき」によれば、三枚の写真はそれぞれ、パリの北の郊外の団地、パリの東の郊外のカフェ、パリ一四区のTATIがあるコマージュンターである。TATIが極めて安価な衣料品チェーン店で、ユニジア出身者が創業者であることもあり、三枚の写真は日本語タイトルと同様に移民のつくり出す多文化性を連想させる。しかし、繰り返しになるが、本書の扱う範囲はそれにとどまらない。著者の意図は、むしろフランス語タイトルに示されていると思われる。そこには「パリ、ジュネーヴ、地中海―余暇空間と多文化的な領域 (Paris, Genève, Méditerranée: l'espace ludique et ses territoires multiculturels)」とある。つまり、余暇空間を通じて見られる多文化状況とその領域を描くのが本書の課題ということである。

フランス語タイトルには本書の具体的なフィールドについても三つ記されている。それぞれの地に視点を変えた二つの章が当てられており、目次にはその対象が明快に示されている。

序章	
第一章	パリの場末と郊外の差
第二章	オルネ三〇〇〇団地とサツカー
第三章	セヨン、南仏の丘の上の村
第四章	地中海の港町セツトと色彩
第五章	国境が結ぶジュヌヴオワ地域
第六章	ジュネーヴ湖岸のホテル
終章	

序章では、観光研究の動向とともに、空間の不連続性をめぐる地理学的研究の流れが示される。英語圏の研究とともに、紹介されることの少ないフランス語圏の動向も多数示されており、日本の研究者にとつて貴重な資料となるものである。本書を貫く概念として〈領域化〉を用いることもここで説明される。それ自体についての定義は直接的には示されていないが、「関係的で流動的」(九、二〇頁)な仕方領域をとらえるという目的が述べられているため、動態的な領域形成のありようが焦点となっていると理解できる。そして「観光・余暇が領域の強弱の変化をもたらす実態、領域が観光・余暇の保持や活性化に利用される様子、領域をめぐって観光・余暇を实践する人々が交流したり対立する背景」(一三頁)などが分析対象となっていくことが示される。本書でも述べられているように、観光・余暇と領域という概念が結び付けられることは多くないため、オリジナリテイの高い視角であるといえる。

本書における〈領域化〉の視点は以下の四つである。一、領域

アイデンティティ、二、越境行為と領域側の反応、三、領域内での雰囲気、四、領域の地理的呼称。それぞれの対象地域において、それらが意識され、分析される。その際に重視されるのは「人々の態度・発言・姿勢・反応・様子」(二二頁)である。これらをとらえたい資料から真実を導き出す方法は「見掛けの頻度や数量ではなく、自分自身が蓄積した体験や知識」によっており、「それが専門であることの意義(同)であるとする。この資料の選択方法については議論もあろうが、本書においては、少なくとも複数の分析において、これが非常に効果的に行われていると評者は考える。その意味で、観光・余暇、あるいはフランスが関心のない読者にとっても、論争的で新しい手法を提示するものとして本書は一読の価値がある。

第一章ではパリが分析対象となる。観光・余暇がテーマでパリとなれば中心地が対象となりそうであるが、本書においては「場末」と「郊外」が主体となっている。パリ二〇区のうち、九〜二〇区を「場末」、その外を「郊外」と冒頭でまずは整理され、その区分が行政区画である以上にどのように経験されるのが分析される。その一つとして、著者は「写真を撮る」という行為を取り上げる。場末においては写真撮影は親密さ、あるいは拒否されるべきものとしてとらえられるが、中心部では撮影の邪魔にならないように立ち止まる人や、あえて被写体になろうとする人が現れる。郊外では写真撮影の経験がない人と出会うこともある。観光には付き物の写真撮影が、撮影者は同じであっても、全く異なる反応を呼び起こすということであり、このような態度の差が領域を形成していることが明瞭に示されている。また、フランスを

研究対象としていれば漠然と違いを感じていても、意識しなければその研究者自身も〈領域化〉の一端を担うことになる、と気づかされる個所である。

ギド・ブルー、ギド・ルタールをはじめとする観光ガイドブック分析からは、用いられる形容詞や記述方法の違いから、やはり〈領域化〉が進められていることが示される。それ自体膨大な資料分析なのだが、そのようなガイドブックには記述されないケバブ店の分析に本書の意義が強く表れていると考える。現在、パリ中にもみられるケバブ店を取り上げるレストランガイドはなく、インターネット上の情報のみという偏りをまず指摘し、さらにその中で評価の高い店はケバブ店の少ない欧州系の多い地域に集中するという。中東ルーツでありながらヨーロッパの日常食になりつつあるケバブだが、失業率の高い地域のコメント頻度は低く、比較サイトの運営者やそこへの参加者が作り出す〈領域化〉がそこに読み取れるのである。

第二章ではパリ郊外の余暇として路上でのサッカーの実践が取り上げられる。フランスのサッカーに移民出自であるプレイヤーが多数選ばれていること、彼らが豊かではない大都市郊外の出身であることが多いことはよく知られている。一九九八年にフランスで行われたワールドカップでナショナルチームが優勝したところには、多様性を持つフランスの勝利として喧伝されたこともあった。現在ではそのような理想が語られることも少なくなった。それでも郊外から多くの選手が輩出されるとしたら、現在のシテ(団地)とサッカーはどのような関係を持っているのか。それを問うのが第二章の目的となっている。

対象となつてゐるオルネースウィッボワの三〇〇〇団地はメディアに取り上げられる機会も多く、本書ではルモンド紙と地元メディア、あるいは一つのメディアにおける欧州系と移民系の記者の見解の比較にも触れられている。とはいえこの章でも、インタビュによるミクロな発言の分析が興味深い。シャッターの落書きから若者たちのこの団地への誇りや愛着を読み取りつつ、さらに通りがかりの人に地元ならではの団地の俗称を用いて話しかけながら、内部の細かい領域が割り出されていく。

とりわけ、地元の子供や若者がサッカーをする「ベトン」と呼ばれる区画の分析は、余暇と領域を結びつける本書のねらいから見て意義深いものである。メディア上ではベトンこそが郊外でサッカー選手をはぐくむ場所として特別視されているが、実際には住民たちを結びつける場こそあれ、地元ではプロ選手を育てる場としての役割が大きいとはみられていない。路上で技術を学んでいくことは確かだが、そこからクラブチームなどでチームプレーを学び、社会統合につなげるこそが重視されているというのである。メディアがいかに郊外の神話化を進め、外に向かうとする地元の意識からはずれが生じているかが浮き彫りにされている。

第三章では、対象地域が大きく変わり、舞台は南仏に移る。この章では「鶯の巣村」とも呼ばれる「丘上集落」が取り上げられる。なぜ人々は不便な場所に住み続けるのか。防衛説や気候説などの文明論を越え、実態に迫ろうとするのがこの章である。まずは一九世紀と二〇世紀の地籍図の比較から、集落が東から西へと移動したことが示される。また村人が残した記録から、二〇世紀

を通じ、地域の生活に不可欠であったグロット（洞穴状の岩屋）が湿気を理由に放棄され、夏の暑さをしのぐために小さかった窓が光を取り入れるために拡大されるなど、変化が生じたことが明らかにされる。

そのうえで、人々が地元をどう捉えているのかがインタビュを通じて記述される。居住地に強い愛着を示す人から、仕事のためという現実的な回答をする人まで紹介しながら、丘上集落は二〇世紀後半になってから、気候の良さ、家屋の改良、余暇的なイメージによって再評価されたのだという結論が導き出される。それは都会からの移住者の増加につながっていく。また観光メディアが介入することによって、外国人の別荘や観光向けの店舗が増えたこともその〈領域化〉に影響を与えている。第二章までの中心性と周辺性の考察にかかわる多文化性とは大きく異なり、ここではフランスで歴史的とみられやすい景観における外来の要素の役割が示されたのである。

第四章では、港町のセットが対象となる。「色彩」という、経験的には重要なが、社会科学的な分析の難しい切り口で〈領域化〉が検討される。まずはガイド分析から近年この町では「カラフルであること」が大きな位置を占めるようになったこと、そこには地元の観光局の存在があるとみられることなどが紹介される。住民へのインタビュからは、カラフルさへの愛着がそれほど強くはないことが予測され、市文書館の職員へのインタビュからそれは一九八五年から九〇年にかけて作られた仕掛けであったことが明らかになる。その説明は観光客の目につくところにはなく、まるでこの町のカラフルさが伝統であったかのようにとらえられ

る傾向にあるという。

ではそのような戦略はどういう意味を持つのかといえば、南仏の他の有名観光地と比較した独自性を打ち出すためということになる。赤黄系統のグラデーションと青系統のグラデーションで構成される市の公式ロゴを流通させ、「カラフルなセット」というイメージを広めていく。その色彩に込められた意味もひとつではなく、当初の意味を越えて多様に読み込まれることも問題視せず、「膨張」に任せていることがその〈領域化〉に寄与するという。つくり出された文化的特性が、当初のアイディアを越えて発展しつつ、しかし行政の意図通りに働いていく様子が明らかにされたといえる。

第五章はまた地域が変わり、ジュネーヴ国境へと移動する。ジュネーヴはフランスに食い込むように位置しているスイス・フランス語圏の都市だが、そのジュネーヴと国境を接しているフランス側も山によって他の地域から離れており、国境を挟んだ一帯が独特のエリアを形成していることが多彩な事例から紹介される。フランス側は食品などが安く、ジュネーヴ側には文化施設が集中しており、また音楽ディスクなどが安く手に入るとのことで、通貨の違いや関税を考慮に入れても、フランスとジュネーヴを行き来するメリットは双方にあるという。

特に越境労働者である「フロンタリエ」には多くのページが割かれている。フランス側に住みながらジュネーヴで働くフロンタリエはジュネーヴ州の就業人口の一五%にも達するという。さらにフランスに事実上は常住しながらそれを「副住居」として登録し、ジュネーヴで働くジュネーヴ人もいる。それはフランス側に

無償で公的サービスをさせることになり、行政からは問題視されているものの、地域の特性を活かす形でそれぞれの人々が生活を実践していることが明らかにされる。

しかしそれは双方方向に對等な関係かといえば、そうではない。整然としたジュネーヴ側とフランス側の場末感のある景観の違いが描写されたのち、人々の意識による〈領域化〉が示される。ジュネーヴ側から見れば、フランス側には差別がある、なぜフランス人が来るのかわからない、他方でフランス側からはジュネーヴは中心街である、あるいは物価が高すぎるなどの評価がなされ、「反対側」と自分たちを区別する見方は強く形成されているという。さらには、フランスからジュネーヴに働きに来るフロンタリエを「社会のクズ」扱いする政党も現れ、フランス側にモスクが建てられることを問題視する新聞記事なども出てきていることが紹介される。本書の出版に前後した二〇一四年二月九日、スイスでEUを含めた移民に制限を設ける法案が可決されたが、その直前の動向がここに報告されていることは、新しい制度が今後この地域へ与える影響を考えるうえでも意義深い。

第六章では、ジュネーヴ市内のホテルの「雰囲気」が取り上げられる。一九軒のホテルのパンフレット分析から、窓からの眺めを重視するグループ、内外装と設備を重視するグループ、観光スポットを重視するグループに分け、それぞれが①湖畔の歴史あるホテル、②旧市街周辺の小規模ホテル、③世界的チェーンの大規模ホテルに対応することが示される。そして、それぞれの中から一つずつのホテルがさらにアンケートと訪問調査によって分析されていく。

①にあたるボーリヴァージュは、家族経営で従業員が作り出す雰囲気重視しており、またジュネーヴの町と一体となった歴史がアンケート等で強調されている。②のシゴニーユは、訪問客が見出すものが雰囲気であるとし、暖炉に象徴される自分の家にいるような親密さが繰り返し示される。③のノガ・ヒルトンはたぐさんの人々が往來することによる賑わいが強調され、「小さな町」として完結している。ホテルが作り出そうとしている〈領域化〉は、最初のパンフレット分析で読み取られたことと見事に対応している。

ホテルの〈領域化〉は雰囲気という形で客のふるまいを規定する。客層を選ぶのは料金でもある程度は可能だが、より暖味で柔軟な形のほうが開放的なイメージに傷がつかないと本書は主張する。この章の最後には、調査者がフロントでインタビューを行うという、ホテルにとっては「突然の訪問者」をいかに消化・吸収したかということも記録されている。ここでは調査者をホテルの雰囲気の中に同化させるため、それぞれのスタッフの行動には違いがあり、また結果としてその後調査者が行ったことにも違いが出たとしている。著者自身を分析対象とすることも、本書ならではの視角によるものといえるだろう。

以上、本書の内容を概観してきたが、どの章においても入手可能な資料を最大限に用いた新しい研究手法の提案が行われている。上記ではあまり触れることができなかった他の手法、たとえばカルトグラフィの効果が大きい章もある。とらえがたい対象にいかに向き合うかが模索されているという意味で、今後の地理学研究において大きな影響力をもちうる著作といえるだろう。

三

そのような本書に関し、評者にとって違和感が残ったのはタイトルである。冒頭に述べたように、日本語タイトルから本書の内容を想像するのはかなり困難といわざるを得ない。〈領域化〉も「多文化」も、実際に開いてみればその通りなのだが、本書と問題関心を共有する読者の目に触れる機会は減らしてしまったのではないだろうか。

期待されたのは、本書全体を通じた方法論に何らかの問題意識と関連させた新しい名前が与えられることであつたように思う。評者の幾分勝手な理解では、本書の手法は国家や行政、あるいは資本が作り出した制度が、人々の生活世界に及ぼす影響力の強弱をはかるものである。ある制度が生み出されたとき、多くの議論があつたとしても、実際の人々の行動や思考がそれに規定されるとは限らず、あるいは規定されるにしても時間差がある。そこに行政界や特殊な建造環境といった目に見える境界があるにせよ、それが本当に決定的な意味を持つているのかどうかは人々の日常に寄り添って見ていかなければ理解できない。その意味で、特に本書第五章の国境地域の分析は圧巻である。フランス語圏で隣り合った地域のあいだに走る国境は、単なる通過点に過ぎない場合もあれば、双方の住民に「反対側」へのアンビヴァレントな感情を抱かせる心理的な境界線でもある。そこには制度を乗り越える住民感覚を見ることができ、何かしらの規制とともに同地域がそのままコンフリクトの前線となる可能性も示されている。

地域によって深くかわる制度は異なっており、ミクロに生じ

る（領域化）の表れも異なる。既存のイシューから出発することはその国の人々が現実生きる環境を示すにあたって大きな意味を持たない。そのようなある国の現状を「記述する」ために、あえて余暇空間という、制度から離れているようにみえる切り口を持って、本書が提示した方法論が持つ意義は小さくない。そのような意味で、本書のタイトルは確かに著者の研究の特徴の一部を示してはいるが、他分野から見ても重要な情報が多い本書の価値を伝えるキーワードとしては弱かったように思われる。

とはいえ、本書の執筆のために行われた研究と考察の膨大さは明らかであり、以上のような点は読者がそれぞれに考えるべきことなのかもしれない。フランスを研究対象とする評者にとっては目標となる成果の一つであり、本稿が本書の価値を減じることがなかったことを祈りつつ筆をおくこととしたい。^⑧

- ① たとえば宮島喬「多文化であることとは——新しい市民社会の条件——」岩波書店、二〇一四、二八八頁。
 ② 田辺裕監修・松原彰子訳『図説大百科世界の地理8フランス』朝倉書店、二〇一〇、一〇一―一四頁など。

- ③ 堀越孝一「ブルゴーニュ家」筑摩書房、一九九六、二九二頁など。
 ④ 古典の域だが代表的な研究として田中克彦「ことばと国家」岩波書店、一九八一、二一八頁を挙げておく。

- ⑤ フランスの植民地支配に関する研究も近年多数発表されているが、日本におけるその流れを作ったともいえる著作は平野千果子「フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで——」人文書院、二〇〇二、三五八頁であり、現在の海外フランスの状況についても説明つけられている。

- ⑥ Lallement, Emmanuelle, 'Tati et Barbès: Différence et égalité a tous les étages', *Ethnologie française*, vol.35, 2005, 37-46.

- ⑦ *Le Monde*, le 10 février 2014.

- ⑧ たとえば国民国家の設立と国民意識の形成が必ずしも同一ではないことなどはその大きな証左といえる。

- ⑨ 本書についてはすでに以下の書評もあるので参考にされたい。高木彰彦「地理」五九―七、二〇一四、九四頁。

(A5判 三二七頁 二〇一四年三月
 九州大学出版会 税別五四〇〇円)
 (恵泉女学園大学人文学部准教授)